



鷄

衣

拾遺



5  
2092  
4



門八利5  
2092  
卷 4



也有ぬの著述のり  
つさぬとわりのひるに  
に錦繡のやける衣の  
りはいづやさか  
より葛中山服の先の末  
斑爛のいろよほ  
いやしたをよす  
淡倍



つらとやうに老の次はとちから  
んづれよまゝにまゝのまゝに  
にふまゝにまゝにまゝに  
六初を命じて天子にいかん  
十初きうは誦習まゝに  
ゆふらぐりまゝのまゝに  
あゝまの市のあゝまらぐり

うまゝに六のあゝまらぐり  
壱種あゝの單筒のうまゝに  
たうれいさいでやるを袖あゝびと  
うまゝにまゝにまゝに  
うまゝにまゝにまゝに  
うまゝにまゝにまゝに  
うまゝにまゝにまゝに  
うまゝにまゝにまゝに

かいらう漢も志もよるり長めしき  
りく月にあひがたうらまじ

六物園主人

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*



守るるら 拾遺上

寄亭記

しんかりい亭よそそよのちあき一は万足の湖を通  
て千般のあ入あいたふ葉のちりふ夕花よもて因を来  
そむらよふして伴ふ鶴あひほよそそそ入てそよよ入姐  
後生てんたう朝あひのころにたの他境よ何て後村よそ  
目の中へそそそそそそそ蘭の葉桂の梅もそそそそ  
か見れ葉もそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
名もそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
ゆもそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
舟外の佳観よあそそそそそそあひゆれら温純考ま切し愛  
よ不老の葉そそそそそそそそそそそそそそそそそそ



君は伯しその山に下りては少納言とあはれはるるを  
すも曉の障とあはれはるるに起さしきくは上殿の  
羨とすそのの楓橋の紫花は唐人の癖とすも警一は  
きくハ介不さるはなすくはつさけ格の枝とすも鳥  
丸交の寄しはるるに起さしきくは上殿の  
大根をつき曾誓う隠居のふらふら栗栖師の秘羨の  
柑子とすもいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
鳥羽とすもいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
三鳥のいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
さしきくは上殿の  
と鳥のいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
身と鳥羽のいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の

わいしはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
はなとすもいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
雪子の枝とすもいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
くのおはれはるるに起さしきくは上殿の

送吹氣神表 于時英武所

今年秋の初をさるるに起さしきくは上殿の  
変氣とすもいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
つぎとすもいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
は昔とすもいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
トハあやのいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の  
芝居入とすもいづつはあはれはるるに起さしきくは上殿の

客なきをば世のり花うらやまきり葛西の凡物と下冷  
よちうくたふし鴨田川の波さもあな難とこりれい木刈草の  
細えこと流方行波のはゆも長髪と忍辱の姿と失ひも移も  
後初の家とくればたり醫者賣茶の門のこぼしきみの判  
のじえも三氣教とまじいひまうくくは河をゆるるは無ん  
さして手柄の濤活とくわんはく一袋茶代とまはし噫は秋  
うまはかうら災は下りて吏民はさる一とまうくゆめをそん  
天神地祇を怒の眸とめりしと雲氣の形作と速とあのは  
へ送るゆめさくは信ちし幣帛のこつとまきんはバ一とま  
毎の紫よきて切らうと轂とふりて及守ちうらうと金  
とまうく一と丹波と拙とまらぬ志とくはなうらうと

菊公賦 無成田某

けある一の榮化らよすくうすくは海はくあもまもむは化  
おまいたのこたかして何たんふは若野の雲とまひら  
け黄玉川の露をわくふあは二月の紅まきちあ  
あは八橋のほとくして詩客の車も傳ひ下り首  
とまの神もあはかん淡涼は淡の色はくくた歌は白  
枝の新芽と咲てまらうと目とわらうと一國はよまら  
とまゆいり陶氏う紫よ各まらは信宿のまののこまら  
とまのてあは一のたのこくはくしあ守春の雨は秋  
と入て裁らよ棠陀うもをくは林のおもは第とあ  
て刈いした圓うあはまもまはくつはまはち大根たま  
母をくはあはかま一と年月のまをまわていうて

けぢのち幸哉きつていとお世に世にありし人も人あり  
 けぢのち幸哉きつていとお世に世にありし人も人あり  
 けぢのち幸哉きつていとお世に世にありし人も人あり  
 けぢのち幸哉きつていとお世に世にありし人も人あり  
 けぢのち幸哉きつていとお世に世にありし人も人あり  
 けぢのち幸哉きつていとお世に世にありし人も人あり  
 けぢのち幸哉きつていとお世に世にありし人も人あり  
 けぢのち幸哉きつていとお世に世にありし人も人あり

蝶

雪見賦

月美はこへたてふまゝと書んはこふまゝと戸をわお好か  
 らんはこへたてふまゝと書んはこふまゝと戸をわお好か  
 らんはこへたてふまゝと書んはこふまゝと戸をわお好か  
 らんはこへたてふまゝと書んはこふまゝと戸をわお好か

とも雪見こふまゝと書んはこふまゝと戸をわお好か  
 まてとちちめー草鞋の跡とるわて白妙なる夜の目とと  
 りかんとなれり世に列つれいこゝあれた例の村地  
 もそ人の起居だん々南頭よあねませいつらよ町に秋あり  
 のちこりうりて酒を温純のけ地よこせまらて目よこせまら  
 ねのまきまきみち廊のけ地よこせまらて目よこせまら  
 なる守力ん師走のやまよこせまらて目よこせまら  
 るおとちちめー草鞋の跡とるわて白妙なる夜の目とと  
 陽の其目よこせまらて目よこせまらて目よこせまら  
 ちらこゝ今家よこせまらて目よこせまらて目よこせまら  
 ちらこゝ今家よこせまらて目よこせまらて目よこせまら  
 ちらこゝ今家よこせまらて目よこせまらて目よこせまら  
 ちらこゝ今家よこせまらて目よこせまらて目よこせまら



白くつらふくかへ入り吟していつく伊勢の家念屋より  
 いらぬ位なる女のかゝりの暮の別はな遠くしてちのあ  
 なま立つらうと初おちやうとくちのまじらふとす  
 ひとと思ひも信らふ今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 はとくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 かゝのらん名ゝゝゝゝ守はてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 りふゝ秦宮の雨ゝゝゝゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

西白れちの遊あもろ小挑灯

旅論

能滞く入る美常鞋の情をもくして旅情をあらぬ人風

といふかゝりやむもゆきもい旅をさせよといはれは総へよ  
 との念言もそまえけら減よたな月雪くちらあゝま  
 こゝちあぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 春やん始て伊勢へ詣てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 も氏風雅とらてき守今のせもいゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 十とせの今もいゝたゝ官海よのゝ世来ゝゝゝゝゝゝ  
 昔やゝゝゝゝ川風定ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 七世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 は親ふゝひ松小舟よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 稽ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ







きて後をあらまひのいへし持て去せらんおまひする人こそ  
思はれらむこれハ銀ノ赤鳥帽をかきしむるおすきしむる人  
ん我せとに古き祖あり久しく久しく身も捨れて今ハ草の齒  
書し洗しききの果ちるをよ上て困居のたきしむる祖よおと  
あ春なりのちとて せんも茶の根ハ断つて  
今よりこそ一花もあらん いふれたのよまひとてわれ

牧子銘 或人牧子と末の傍おはすきして

夏より早振が多お牧子ありて用ひされハ嵐と揺りて味も偏  
のほろろれ用ひしうして虎の勢ありて床のうへへしうかん  
あ分とらと作し捨米し田一幸とふ似れどもうを世のなと  
へして牧子定銀しむるなりけり

千竿亭記 島下陸氏之書

亭ノ名つらら千竿とてすらん其まじりなり井ハ古人  
のいひしにちりて友し今更あらまきしおハ年ハちり  
甲斐婆ハ目ハあはれかんかきして蕉門の風雅いふハ  
は夫の空にまじりてまじりてのなもまじりてまじり  
大男ハ何ものまじりて流りておハのれハかきしてまじ  
東波しと骨しといふまじりてあはれかんかきし 釣針のは途  
かきしと骨の骨まじりてまじりてまじりてのなもまじりて  
湖の舟棹しと波の波まじりての釣竿しと今ハあはれ鳥の雅ハ  
尔哉ハ竹の杖の老とまじりて能流りまの指とまじり  
千竿の名のいふまじりてまじりてまじりての竹のまじり  
名もゆふまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて此



くらたりく半の今頃の思ふはなほあつたか  
その松の枝もそ常盤の山の岩つゝ  
こゝろのちかひのちかひのちかひ  
子万言のくらりたるお白の吹か  
の思ふを寺者寺洞し情けな事といそ  
は舞の流よはたけ

贈五條房画賛

小松殿の教訓の琵琶法師の曲成りて  
呉見八丈産和泉うなは信じて  
或一我をすすむのこわ画を  
あ切の一倍始て目覚めたるは  
世をくく人々もいふもいふも  
是れもいふもいふもいふも

五條坊は猶て昨世を改らるる  
うらろあゝ人の塩ゆち師業う那

蛙歌

蛙こゝろの浦のなまめりし  
にのこまけてい徳りた  
うらろあゝ人の塩ゆち師業う那  
蛙こゝろの浦のなまめりし  
にのこまけてい徳りた  
うらろあゝ人の塩ゆち師業う那  
蛙こゝろの浦のなまめりし  
にのこまけてい徳りた  
うらろあゝ人の塩ゆち師業う那

おぼろし〜朱雀の小田〜啼つれて逢ね〜れの時  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜

美人記

旅の位わんおぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜

忽お〜人あ〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜  
お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜  
お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜  
お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜  
お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜

増山井續連珠の題とこれに似たるおぼろし〜おぼろし〜

おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜

大沼川あり〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜

おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜  
おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜おぼろし〜



まに人ごみの世に入して世に世化せしむればあつしこのい  
ちよひつれて世体のなをいふはうへに晋其の用は世にいれても枝  
も葉もつらつては世の子を教きし白京日本のときうくしすうれ  
てつらつたきみみそしをうへに強てそのあはれを求めん  
今も小考見よくぬ休の大根細  
いふは世に入つてもあまの世の世をうへに強ては世に世化せしむ  
ははは世に入つてもあまの世の世をうへに強ては世に世化せしむ

その甲て舟ぬらひつら大根引

世はつら手ひぬらひ

大根引らつても世に世化せしむ

世川の世のつら果はいふ

世女に世は世に世化せしむ

世はつらの世格はつらつたきあまの世に世化せしむ  
のつらつたきあまの世に世化せしむ  
に世に世化せしむ  
あつらつたきあまの世に世化せしむ  
世に世化せしむ

悼又な舎文

世帯の世の世に世化せしむ  
月の十八日使の人よりきて世に世化せしむ  
世に世化せしむ  
世に世化せしむ  
世に世化せしむ  
世に世化せしむ  
世に世化せしむ

使せんこゝろもいそぐぬらふも日又の由りきりしほをあら  
らめいれのおとほへしんじうまひうへき世はたも  
りなきしりころあしたのうきりたり昔田はゆらひいそぐ  
ふきの石もつせせ二つせ今ハ尾城の蕉門の二巻とかな名中  
四方ふるかりか幸も右様も信三つはかりもたすや  
吟りいまた杖も守礼は暇後と忘らふたれり来遠  
たのしん人のいり廻りいなる嘆すんを教へてまをさひ  
いらねおほいさすんりの袖いりあまの庭のあまのま  
れういりよま彩てあまのさひもまといひり

古公のこ人まかろをさり夏の草

贈巴水辞

廿五才の勤勞あてたぐ功かりて今や耳目肺腸も  
まかりいへてまの世帯をいさむいらまおひ  
はめよそのらあきらめあへ巴水うへ終とす  
ろハモ多うい

昔もやあまのこはあまのこ

其別墅記

あはれと剣を佩て芸中はいさと居しゆへい  
つろそのそり言はくわくお屋敷の舞の戸をのれ  
ては閑居も身にあふそのあまの茶とよめも素人  
まわると利休もすはくもしりきりれは下戸をれも所  
とくも寸三も閑ぬら風はとくもふさてををら

柳町のその五株のゆりちりかへきこやみりーの山の  
あふもいよ常しうねとくし何ぞかめいのすこも葉をや降  
ふららほはしお入きう雪の消し豆腐賣しこ守つきの  
夕八酒をも傳し舞となぐけし山極のあやし市の中  
にありてありし車馬の響をきり次はしゆしゆとわ  
ましく温飽をきりも自由をきりし庭の僅のる比を  
北よ一重の窓をひく千町の田つ軒よりつきて四と  
まの陸の声をきりし家の鼓吹をきりし早苗をきり  
巻のさいらひして車風を夜かへしやうやう守りて  
楯の雨もきりしけしやうやう守りてしゆしゆとわ  
まへへりるるをきりしねのめは師とんしき位居な  
ると冬へるとはよふしゆしゆとわと判候は梓とんしは

す佐師をきりしやうやう守りし火燈を自くしゆしゆとわ  
も首王維う輜川の別墅とこのおすきいけしとんし比は長  
月をきりしやうやう守りし旧友とんしやうやう守りて所の森  
春をきりしやうやう守りし十五夜の月をきりしやうやう守りて  
忘るしやうやう守りしやうやう守りし葉をきりしやうやう守りて  
そららば序わらしけ記を記してしゆしゆとわし英蓮のらり  
辞しゆしゆとわしやうやう守りしやうやう守りしやうやう守りて  
うしこおしやうやう守りしやうやう守りしやうやう守りて  
又しゆしゆとわしやうやう守りしやうやう守りしやうやう守りて

各樂卷記 在業雨需  
獨樂園のぬしゆしゆとわし其記を書きしやうやう守りしやうやう守りて

のありし家より死を求ても樂をうけし家より死を  
天の地をさし世よなきことのみは内事なり樂を求て樂を  
するもの哀情をいふる余は死を求むるに林風の音をうけ  
いひしういて今年秋に死を求むるに五山の雲の音をうけ  
きて夕の夕吟をいふる余は死を求むるに五山の雲の音を  
うけしういて今年秋に死を求むるに五山の雲の音をうけ  
備舞造のたのしみはなかりし世務仕官のたのしみはな  
かたのたのしみはなかりし世務仕官のたのしみはな  
しとて求てしるしを求むるに死を求むるに死を求むるに  
世よなきのたのしみはなかりし世務仕官のたのしみはな  
かたのたのしみはなかりし世務仕官のたのしみはな  
うけしういて今年秋に死を求むるに五山の雲の音をうけ

月夜にありしや心のありし歌

枕石記

一日本全きこと告て日成人の家の教は色夫なる石のたの  
しみはなかりし世務仕官のたのしみはなかりし世務仕官  
ておもしろいことおもはるるに死を求むるに死を求むるに  
鳥貴なる者ゆきし世を求むるに死を求むるに死を求むるに  
り世を求むるに死を求むるに死を求むるに死を求むるに  
の國の五穀村勝原村よりかきし世を求むるに死を求むるに  
上と守れらるる今其れをいふに死を求むるに死を求むるに  
て人よりし世を求むるに死を求むるに死を求むるに死を求  
むるに死を求むるに死を求むるに死を求むるに死を求むるに

中曰謀略腕をそせりも外は何と書いて日記を作らん只も  
人よく傳へよと本全程ふまふや守りまわてまじり三人  
の傳ありともは不言の仍とゆき既一一人の傳誤て言  
を後とつ傳誤きあつて何と世を敗りてあつひや  
残の傳之りもつて二人の既の仍とあつて今者ハ  
我一人とつて年三傳の仍ともいふわたりといは傳の例  
とせよといふも即ちつて何と世を敗りてあつひや  
つて亦即記を作るといふも何と世を敗りてあつひや  
つて亦即記を作るといふも何と世を敗りてあつひや  
つて亦即記を作るといふも何と世を敗りてあつひや  
つて亦即記を作るといふも何と世を敗りてあつひや

定科号序

大井氏宅先子の武門よりしても家の枝は拂う寸草は御  
ふ悩る所ありて近きも遠きもすくいてはら茶もたつてす  
つへまゆはともしも茶師守らるをとりて五斗の米のゆを  
たら三石の奈ら茶と甘をい帯は蕉門の月をたふさつて  
然谷や茶常と観一能はう忠も懲りわつて茶もす  
は衣ももも守は長お織は天照着中のは水のい  
せいんらぬ人のい  
る事ありてつれ  
中も茶と  
まじりの賽おつたのため  
らひ世は傳へる人のい  
茶の科号と定



... 彼の... 他の... 他の... 他の...

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

中州の衣

拾遺中

岐岨路紀行処享二年

乙丑の...

君よ... 乙丑の... 君よ... 乙丑の...

中州の... 武府の人... 中州の... 武府の人...

夏の夜の... 夏の夜の...

今昔... 今昔... 今昔... 今昔...

上店の隣酒のえぬ頼一しては侍らまゝに酒を頼めがさか  
らぬもいふいふせいの山とありてこの川はくちや  
書けいんこののらぬ人ほはたかたあつて殊にま  
の及しうらむとあつたもいふはさかたの  
一筆のしるし

家いふはまの夏の日

昨夜上尾は海

七日

慈谷寺の正実の像をいあらうららのおはな  
くてまよふ寺

慈谷寺にてはつらや

今夜本庄の泊

八日

くらくらあつて

くらくらあつてきや里も木下町

くらくらあつてきや里の物よなとあり侍りたとき  
よもせいのあの人まゝに佛せいのすむをいふ  
御お事えらるの回もたうにやないやあつて

権佛もやうていへてあつた

いぬ候鼻のよも

九日

唯水崎を越ゆる般若石といふ嶮岨とすきてよもこの  
くらくらあつてきや里の山谷の松樓まゝに木



のめま...  
は...  
た...  
け...  
ま...  
い...

綿入ともる後の夏やたの旅

雛の足ぬら湯の極ハ日月ノ作

追...  
馬...  
追...

ま...  
ま...

蚊...  
蚊...

十日

け...

あ...  
て...  
は...  
よ...  
り...  
か...  
て...  
つ...

やそそい織しらう武藝坊

十一日

北田峠をたてて決つていふはれてさき嶺とて今すこ  
上の方尔鳩の峯といふ日本よふ方々さき  
これに圖に記さる人いふしきんねんかおの多  
く残て有るふといふ雲海さ中なるはよ思ふし  
やとこ

雪あつてすおやう山郭公

以尊僧のたがひかふここのり谷の曇り  
きん此そよふかふ山里を登らるるがし  
おのくらの交はるやわんがむいんか  
つらやういあふ

牛山よとせら

十二日

あふ後一乃て山村氏の家よりせむ家  
あの上下よとてさきて何れりてか  
細師かよの膳よひららなるか山家めきたる  
姐夜のならけきり決らんか島

十三日

かハ名よあふけ橋よとら

眠るなしてさハクれとる合のた

信川寺よつせりいで孫そんの末は信守  
自由をえんをめつてまおあし  
あふきりまあふ





日下山々のやれは比叡もあや後豆の両山眼下よりなる  
景色いふとより一富士八西の隈かここの林のたもと  
おーろきあ長錦高細とからけけ山の徳をまきまき  
田方山のまきやあまほりまき

那ねくえの保殿の后の跡のまきとあまほりまきの  
たもとにの対する林の保殿の后のたもとの  
まきありてまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
まき類の科とまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
まき類の科とまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
まき類の科とまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
まき類の科とまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
まき類の科とまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
まき類の科とまき類の科とまき類の科とまき類の科と

有ー中此のまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
伐ーまきのまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
らまきのまき類の科とまき類の科とまき類の科と

ねくしてまき類の科とまき類の科とまき類の科と  
保殿の初まき類の科とまき類の科とまき類の科と  
は下梯のまき類の科とまき類の科とまき類の科と

湯木控改の家族とまき類の科とまき類の科と  
伊豆控改の家族とまき類の科とまき類の科と

あま山まき類の科とまき類の科とまき類の科と  
業卒井八屋まき類の科とまき類の科とまき類の科と  
てみのつゝ妹脊の嬢まき類の科とまき類の科とまき類の科と

まじかしのこゝろをいかにかきよめしむ

卒なま湯をいふやうに卒なつといふ

よそ中のよきものにて旅をいへり

子よしのいふにわが成る立田姫

ま陽をあふ

携のちと書きいひむら木

なつ月

山の湯と温泉といふなつ月

木のこゝろ

木のこゝろをいふに木といふ

まら木

まら木のこゝろをいふに木といふ

天神

お石をいふに木といふ

ふ鶴り崎

はらの宿といふに木といふ

大ついでくまをいふ

大ついでくまをいふに木といふ

いふにいふにいふにいふにいふに

まら

まら木のこゝろをいふに木といふ

十月十三日のいふにいふにいふに

ら徳倉といふにいふにいふにいふに







内津草

うつゝの里に宿る更山居士此より予り庵より毎  
にその上の山に宿るもあらず一からせんとの次第  
幸ありんば今も老の務めかまはりて  
眠らざれば世の事もあらず一は秋の  
ことんきりし山里のくまも  
のわりとて人業月中の八日五つさらん庵とありし月  
くまもすまひなりて世のこゝも一也  
世にたるとのこゝ三  
止し予りし昔もあらず一は  
てはらば伴入り宿るの中長く  
ありてお喜もかくは牛の人  
始はぬかたも名もせし何れ  
かくも一は家もあらず一は  
もまもあらず一は根とくも  
おれをわたりはまありて  
なり

おれいづつはあつたりて  
おれいづつはあつたりて

片舟よこしつ所のり

やい人家をいかにせし  
おれいづつはあつたりて

おれいづつはあつたりて

おれいづつはあつたりて

ふりばしのたかし

うら人の遊あけやかきよあ時雨

べい月たぬむらさきとねんかんと可

精藤うらまじいあけやあきま

うねねとふらとらうりあゆみのとらうり  
いふ

水に空れ目へさうさき居ね

是より杖受うらうりあけり大泉寺といふ  
つらうり思うりあけりあけりあけり  
又かきよむら

山うらむらむらむらむらむら

うの側は尾ひや比奈とらうり霊鈴あか  
の信保するとも

尾ひや比奈とらうり

きりやけ松のころろとん

坂下ぬ知西尾たといふ里くとつり

かきたるむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
津まはあは試々あけりあけりあけりあけり  
者うらむらむらむらむらむらむらむら  
とらうりあけりあけりあけりあけりあけり  
とらうりあけりあけりあけりあけりあけり  
とらうりあけりあけりあけりあけりあけり  
とらうりあけりあけりあけりあけりあけり  
とらうりあけりあけりあけりあけりあけり

くけの骨——あかんたすふ

と歌はきやつれいし——あつちのしんがし  
く舉くなんよきくさいん大まきす。若もるせま  
くもたら様なるのとて吹くは溪泉の度よき

をよきのきみの細るうつ——

いらそりのゆほよつくとあつちのほまが兄宮の山ざらり  
枝のちま物ま——くつてふよつとけいふあつち  
すれり

山ハ枝はとも新酒——はらぬ

あつちわしとらふよとす——あつちのあつち  
ましま——あつちとらふよとす

あつち

つね名もはの十九枝の月

と振——てらの末もあつちつあはなる虎溪と入らつち  
よ——はつちとらふよとす——あつちのあつち  
目もあつちとらふよとす——あつちのあつち  
をありて——あつちとらふよとす——あつちのあつち  
もて水の音若——あつちとらふよとす——あつちのあつち  
口花流亭と額と掲けりけ名孫持り——あつちとらふよとす

はす——あつちとらふよとす

け日妙見文——あつちとらふよとす——あつちのあつち  
い——あつちとらふよとす——あつちのあつち  
——あつちとらふよとす——あつちのあつち  
ま——あつちとらふよとす——あつちのあつち



あゝいこるら片山里とらとどいり更山居はは  
もしも分派たりあるままけのさきすすてよま  
て洞夜をもしもほいよころつひたるあまひも  
々々いあ一方らに目女うのなわ

府下も移すよはきふいそりわ綱圓和尚追隠  
ていりん性ちとくはね位の人より久しくねる  
らひをねるの隙はけいてとくよりけりてゆりな  
宗

深山客稀有孤猿豈謂高軒過遠村

煨芋無收寒涕力肯令王帶鎮空門

勅を賡て謝寸

滿耳溪泉又断猿渾忘塵想宿山村

逢君猶憶重遊約嶺上雲多恐鎖門

あつたあり一箇すじとてこいさきのさあはくまふ  
体は杜若とつりて水をりりる洞へももりたは  
花たのあをとりつたの形をまわひてあ

八月れくらはまゝかまひて

はてそやうなわらへ花

若きよこの鼓のあまひよろろのゆゑのゆゑも  
も柿も枝を造らんそまをあやまら血流れな  
くくさうきとつたりしやそ哉あ

くろくそまけ極向手くきとた

くろく柿のたこのゆユ

とらふの例のなまなぬ

ある一筆竹の二幅とて賛を求む唐はまの筆か  
せとせしむる不けんうをいとい絶をつらりて

不與梅柳交心似厭塵思  
露深夜雨餘何借二妃淚

也書であし

雨とてれあて見さるまは試タウもに信はな  
刺考まとるり是いとけりともをきしと拓く  
は白きる二度げ家なるも日こく一又小止  
てなの上と端の声きまといつ一日花流巻の  
人の山とる後後後の餅と米めしよふと信  
居ちりりつとてをりりくふ馬あやかく  
りて姿ハと守

おたるまは稽まく山のタウ耶

と書てあふよし

廿五日かゝりて雨晴むか唐漢をいよ出らん  
不と思い二里をりた田りてそのかゝり  
かゝりていよあやめあやいよてけいのあ  
神とてゆいといよね返つやり下りてをり  
彼の境きいよいよいよいよいよ寺の  
やうなるいよいよいよいよいよいよ  
ふふふきかなんこら一校格をか頼礼  
かゝりあまききとあまききとあまききと  
一と遠なるもの荒なるあやいよいよ  
ふふふあふふふふふふふふふふふふ

とせし家におもて奉り守門のあふ川は流し岩をくち  
もまのあつものなる隘くされたるをあのなをよもた  
くおのつゝとあまやうたのわいゝは座禅ふまよ  
くらまき岩ありもよのわいゝまよのらふ

座禅ふまよの山の色

ゆるさのなるすゝいふき草かーまてはのぬくれ草  
の青に同さうらり家門のいゝまよなるいゝまよ  
あくーとまよまよまよまよまよまよまよまよ  
つれいゝまよまよまよまよまよまよまよまよ  
三止りまよまよまよまよまよまよまよまよ  
あまらまよまよまよまよまよまよまよまよ  
座禅ふまよまよまよまよまよまよまよまよ

日くすゝいゝまよまよまよまよまよまよまよ  
てまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
いゝまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
くまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
いゝまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
いゝまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
いゝまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよ

いゝまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよ

是よまよまよまよまよまよまよまよまよ  
能滞してまよまよまよまよまよまよまよまよ

ついでその文樵るももけく句も直りけり事終りて油  
しぬ詩いよの作りてあやうき句

張北山林遠府城相逢多日雅談清

秋深老樹添霜色夜静流泉疑雨聲

驛馬稀傳都下信啼猿常動客中情

總看隣店商家在豈比塵囂爭利名

いよまもてしらのいししししあは

何ぞよらうきにけしそーらうき

あらういんあん寺よんあうあうあうの僧我たあら事

あまりて例の河海子よとてかまされぬ

清もらう茶や山寺の杖のえれ

あやうの来うくいしてとあ

廿五日しつとめて内陣をきてくらあうし行府下まで  
退らんそともあひお行厨のすかまらうくくもて世を  
捨人よ似けなきいよ文例のこまらて

老武者の衣もあうかけさぬ盛り

いよまもてしらのいしししあは

いよまもてしらのいしししあは  
うけうふのたをまらららつれはな方らわー祿もし人  
まの逢うーまにほけりーまの昔よりまらまら  
めちぬ物しそまはへの途どのれおのつー名村は  
つふらの涙もなりししし中々命つはなきならま  
まらうまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら



かへはるるももたぬいそきはなすわてさすうらな名残が  
かへる跡のゆくへりこころ

雪の山に

左と右とあつちかへれもへさなふかたへ一世出た  
くてはしほふなるもみ水うさつりれがふいてい  
流りかたへりまぬすはしものせいでいふよいかそ  
中くあやうかんふいふとやうにたへたもまはた  
よらういりきいれもたへたもたへたもたへたも  
かたへまふいふとやうにたへたもたへたもたへたも  
くくく光のほろくおもしろくはくはくはくはく  
大いなるいふわらふ

帝衣まぬ杖をいかに河渡り

吏より大なるねよとやうにやうに夕白くせうに  
業棒もえりあわ

あいつのまのふくまのまらねが

ゆりてはさしうらすいふいふいふいふいふいふ  
あつちりて更幽居よけり字のいふいふの書はわ  
おし少りいふいふいふ詩歌のまわいけい  
のけいたるまがいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふ博志の二帖をいふいふ屋上の鳥よ及わらふ  
くむやわあまらて燕石と十發せし宋人の愚よい  
ぬいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

とく天の神笑ふし足跡なき山にやちて  
家たぬ恥をとしへしを

安永二年己九月 七十二翁狂夫也右

夕つる夜 拾遺下

詠余白俚言

相もく人のがり梅雨晴のやののめて同めて侍りそら  
あ〜一仇借のサ〜ちりてさわらぶ〜いふものよふ  
そこよむねれのゆ〜い〜い〜反古ありゆ〜い〜い  
此益ち〜いよ例の子供の踊〜い〜い〜の響き能わ〜い  
人よ〜いのさわて〜い〜い〜あつ〜い〜い〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
能借〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

いふはよいくて是かよひに出入りせむにんかへのさし  
あつものちよとよの様は思ひます只こよひよとにや  
さてん我は得せよといひて取入りつせはよ余白  
あつよよとよと清よくふよめあつめ題号といふ  
さと茶の湯はよとよといふめと其人いつりたり

世の中よすむれてるよのらあはの章の茶の  
う治の都の辰こそれよとてこゝの都の未申  
あつよの誰う名よ立て濃茶の父の清よと松の  
位よとての困ひといふにひくると情はあれ  
床よとりかよとぬ誠あり合回まや人目の中より  
よとくういふぬ口切の後よと名の下地はあつ  
月のこゝつてそれといふぬと母の人の口は徳戸も

立よぬあつて立名う立名のゆきをよとて  
池田は山屋の雪よといふとひりう其白雪の雪  
とらて雪はあつぬあつれはよとて物あつめ  
あつはよとて入るよとてこゝの雪は人よとて  
のこゝの雪のあつてはよとて雪はよとて  
あつぬのこゝの雪はよとてはよとてはよとて  
ちよひよあつてはよとてはよとてはよとて  
直ちよとてはよとて茶のゆきと文字とせよとて  
茶せんよとてはよとてはよとてはよとてはよとて  
岸よりのあつてはよとてはよとてはよとてはよとて  
くれよ五条のりや四よとてはよとてはよとてはよとて  
茶よすのめく月と日とあつてはよとてはよとてはよとて

かきよりのそびでくはよはるのくひく昔は  
のひをいよとよもすて釜の中こめを煮はんはりの  
末長くゆげ万代めく

是は述世女てまんとあつたりていふに存よてくはるに女もあよ  
りしつていふれいかに人の長きいふもつうりていふそのいふに  
あつていふ

辻君 ウケノ韻

月よりのくもも多きよいそ夜あつと浮きよはら。  
神ハあつこの人をねきそ 林の草よじやといふよ。  
待てお園のいふいふと あつていふれのみハあつす。  
晴くよてのいふらハ 馬場の板道のあやめいふ。

茄子 エケノ韻

柿よりのいふあつよ 瓜のつよあつよこれ  
つけりの夏のあつよ 野道の杖ろゆあつ。  
あつよのいふいふハ 豆腐のあつよあつよ。

凡語 ヨコノ韻

あつよのいふあつよ。 あつよのいふあつよ。  
あつよのいふあつよ。 あつよのいふあつよ。

公卿像賛

富き海よ浮雲 清き初て正風

道のほりの木槿とゆいよよ人の教る  
忘のまくり 芭蕉ゆ裁ておく己うたしよ

此翁くわく画く梅疲て笑ひ事をて高し  
差と推して旅の情やまは 筆とくわくて替りて辞あり

又 ウクノ韻

旅路よ故人とくわくし。いひてゑ故人とくわくしぬ。  
それより故人来故人 只せぬ人と慕ふて申す。

又 イキノ韻

詩家よ李白くわくして福はとよ。旅には柳きして忍ぶくわくし。  
うわよこそこのまら茶の味もくわくし。さよ百々の酒よくわくし。

公母題並同賛

題笠旅装吟 尋花狂客心 豈無廿方野句 可識不言深

人口 ウクノ韻

細もまらりよまらりつ。 十年の業もよ老や忘れぬ。  
からぬ七茶セリつて。 今たものよの字の行とけり。

蛤 アカノ韻

ゆくの月の雀くわくし。 竹の枝もよなれし。  
今ハ素たよ替りて。 雲うけのゆりらさ。

亭園翁題 ウクノ韻

~~~~~夏のゆよくわくし。~~~~~

一 ありあけのなまぢりゝゝ つけてをのゝうらゝい

よちの師よ書てあゝゝ一 聯句

空の海はみぎよはくへ 桜のりの汐干もたぐ  
空の梅はありはさりて 雲の後よ落ちもたぐ

大艶銘

買人の耳よはるゝねり 凡の吹りもすゝれり  
汗叩もはよ余れり 雪の降るももなり

舞の賛

及るぬ舞よ思ひささて。 ぎふたれもや舞いあめ。  
のふれは落る悔わる世よ 測は信身と安んじり

布袋替

時よ綿の世は〜 布の袋の名もなりぬ。  
梅の肥〜 我とぞ〜 あり愛〜 梅とぞ〜

廻文

は〜み〜つ〜つ〜ま〜を〜待〜て〜ゆ〜ら〜つ〜つ〜こ〜ま〜

御借方辨

襟〜の〜の〜て〜ま〜る〜居〜れ〜且〜ぬ〜且〜ぬ〜入〜り  
伊女波女〜の〜善〜身安方〜の〜の〜











秋の暮一度下り世東艾とよきけき  
雨窓よりいれ笑つゝ歯あはれ  
零悴せむる須臾なきいふもや先生  
雨よりそれ人ハ一世ありて  
一景の上は遍くこゝろおぼ  
素教の責いふもや先生  
言こつり先生をいれ先生  
つりておぼ臨めり長物  
こゝろいふもや先生  
あつちつれよ先生  
其後古も店をいれ先生  
おのゝ其後仲跡山に登りて  
際雨とて音わり先生の  
いふもや先生

悼伯母辞

是ハハチ母の辞也  
うんきう只きし  
一神のたまひなり

武蔵は旅立ちの途に  
例のよめやうのこゝろ  
ありしやうの頼は  
つけてる  
庭よこせ侍り  
い侍りつれ  
うなは



世上用立物よつさへ般鳥熟并虫のよき

一 統の筒界をやり其外行化西交品あ段

ト渡修たの条、とて度初守トト事

一 蟬すーの羽織と着修事ともの至、向後ハ横麻

一 羽めさよ仕替ヤト事

一 松虫修虫のよき、葦のくらくして砂糖水と好と奉るの

よき、向後ハ野山の通露くくりて精出るヤ

ト事

一 蟻塔と細事自身方の功と以建支い、後ハ

事と奉加ホ頼、我ハ一切い、すま、且又

熊ぬく、あわり修、大勢連うて、無益の事、以後ハ

二三人つ、ひま、修、奉り、ト事

一 螢虫中火と修、お行、所、家、火のわく

氣も、あ、得、ハ遠、い、す、川、田、水、カ、

ト事

一 蜘蛛汚、地の内、み、り、細、り、修、虫と捕、

事不、至、以後、其、場、所、修、虫の、運、上、ト、ト、

ト事

修、帽、り、修、運、上、ト、事

一 蜜蜂の小便、高、車、よ、賣、り、方、の、痛、な、り、

向、後、ハ、世、一、統、よ、只、六、年、の、積、を、

ト事

一 蟻、蟬、己、短、意、の、我、修、ま、り、世、修、と、以、修、虫、修、殺

害、い、不、修、千、万、は、修、向、後、ハ、修、お、ま、ト、一、切、い、

かきこし

一金魚のよき近年こころはる美は柳より竹向後  
舎紙の飾一ヤ門いこますく

但赤塗は砂紅白事あてはくす作

一 蛤春暖のころ己う快晴よふらり樓一各を建しゆ甚  
奈のさくは柳さくく向後ハ右岸の普請一切毎用ハ  
り一居宅の柳指く根つたて用いたし

一 蝙蝠益々椿下より居夜、人里村室へ依何く  
其さきと得きり鳥獸のあつめ、竹あさせり何さ  
中ぬき後事ホ柳つめさう不夜の至く向後ハ立合の  
支配をけ雨後竹度つめさき事

一 音喚鳥根は五色の綿繡を着いしゆ甚大考す  
向後ハ竹より一色は柳改勿綿縫竹ホ一切いこま  
まし

一 白鳥白花ホ世向ハ柳さく修老年ハ頭さく白さく  
稀さく近年根は柳よりさく  
あて異柳の幹いしゆ

一 鼠塚入の幹さく柳園さく井口鼠は五拜行り  
さく以後ハ指湯よて柳海さく指湯の上  
天井よて躍たて仰さく人、姑は柳さく様  
明き二階塚の下おさく盆の中踏さく

一 得、つゆは酒を好く乱舞の泉奈のよき尋陽の江  
さくおまし向後一切毎用さく  
あて會合されありし一程一柳さかきし竹を

酒ハ其掬き方のけ酒屋まで小買ひのしりふり  
一 裡わくりと四角半ののろし共ゆ立人と遊く法を  
一 金派と共りたりしむるもよろしくも右の業相止  
一 馬の太鼓の多往還向屋前分憚るも不滞の至り畢竟  
これし業相のしりふり得るは相止なり

但辰よそハ苦くす仍得るは火のそ時の太鼓  
こ合なり様相なり

一 昔鬼赤鬼のしりふり虎の皮の禪しりふり  
病犬の皮沢山より得る早速仕替なり

但右ハ家持のしりふりの鬼の事一借屋行召仕の鬼  
しりふり古き相油合羽のしりふりを腰にき用いしりふり

右の冬しりふり相守なり一忽しりふり得るはわらわら  
これわらわらゆいしりふり急度外なりしりふり品より蟻の西代  
組頭よそ越度しりふり

宝曆九卯七月

玉壺軒記 應蒼原楚巾老人之書

何と必しも深山の中甚高座の下のしりふりむやむ朝廷  
は俗と遊しりふり耳目ハゆのしりふり世のしりふりわらわら  
この市中ハ一つの徳家ありて豆腐賣ハゆわらわら  
しりふりわらわはあハゆわらわらしりふりしりふり住居乃わら  
九尺よらぬ別室しりふりゆも白しりふりけしりふりわらわら  
と娛ましりふりしりふりのしりふりわらわらしりふりわらわら

何一人の残しを日々に忘れぬ今も困りて今ハ何れか  
しり人の多き山本村にてとらふも世ありまや  
伐木丁の桶屋のくくや びよりのくくくくく  
菓女屋の脊戸の田家山荘の凡流くくくくく  
四方の城下の豊をくくくくく 竹の笛も雨の口の之味線も  
近うぬ方は音うひて我方へくくく 園庭さハ推音  
枚苗もくくくくく 秋もくくくくく 安さくくく  
安さくくく 仕官ハくくく 北山移文の悪口も  
あめくくく 考ゆしりて遠くけ酒ハ潤明く揚し  
かくくく 是くくく 佛借師のくくく ありて戸柳さ  
さくくく かつりの卵くくく 軒玉壺乃  
二字の題ヤドれくくく 大事のまんくくく  
町代ハ考もくく 列の頭ハ何れ考ゆのそんく屋もこれ  
まゝの目利ハ及くくく 毎も酒ハあくく 女あわく  
やうて塩辛ゆ柳つりくく ちくく 何れも天地  
をくくく 市中の壺くく 酒ハゆき 松園合もこれハ  
是くくく 古くく 只世亭の入口くくく  
客くくく 内ハ一歩の庭さくく 草のまきよ  
似くくく つかやくく かく 入れも彼上人の  
柏犬はくく ちりてくく 列ハ一生の損くく  
世もくく 即座人ハ世の庭めけてい味く  
夢ハくく ことく

夢標茶記

くくくくく 夢標茶記 夢標茶記 夢標茶記





名亭説

おの洋なる長江川を引いて向はる親なる橋本山たるま  
よといあるの書法よらうと亭の名付るは親洋の二字を  
傍ら山間の内の上のれれは禁せす用いてさるらんを信を  
必しと云ふ事なり

悼ら、庵祥

仇盛り又種は散らさけ懐と世の心算ありて古庵の  
ぬめりありぬる時蕉門は後良の女世をわてとい  
はれしは家ありては本年の推致といふ事なり  
のこを寸の父貞静は孝と人よるを思ひてま  
世のよきくハ名もぞとれりてとて承祖父の世なりといひ

又岡門下よりすまられたるは親はらかばらさ  
多く撰集しと名をなすれはいてる世のよきぬ  
らきありては親はらさるるをいひては行てはの親  
ぬめりて西行は師の親はらさるるをいひては行ては  
はらさるるの親はらさるるをいひては行ては  
よりの親はらさるるをいひては行ては  
はらさるるをいひては行ては

様をいひては親はらさるるの事なり

其自若庵文

このは是らに自若なりわたりぬるも自若なり  
親より一瓢のたぬぬはよくありてまたなり

あゝいふも善哉了山子予に菴きりかゝり  
一白あの子をなかりりすはるのせを  
称と一子女のこゝねをいりりしれ又自若  
と

タウがよあすのあかり終り

名亭辞

いゝゝ廿居より三言亭とていふはよ  
りゝや只物のうねりや人或にこのやゆ  
衣合短と刺せんよるは月夜とていふ  
ゝゝゝやゝゝゝのやゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

長泉寺碑

何れも人の思ふよる法のるよるもいふよ

辞世

病来辞世路 久隠長津農 八十余年夢 警回曉寺鐘  
すのふくやと思いつて終り夕のねをわくせむ世はく  
短夜やいれよとていふゆめさめ

平定寺碑  
長泉寺碑  
長泉寺碑  
長泉寺碑  
長泉寺碑  
長泉寺碑  
長泉寺碑  
長泉寺碑  
長泉寺碑  
長泉寺碑

平安書肆  
 浪花書肆  
 同  
 東都書肆  
 同  
 同  
 尾陽書肆  
 永樂屋東四郎  
 前川六左衛門  
 岡田屋嘉七  
 須原屋茂兵衛  
 敷賀屋九兵衛  
 河内屋木兵衛  
 勝村治右衛門

尾陽東壁堂製本畧目錄

上紙摺為用摺  
 由好次才出来仕

|       |        |   |         |    |
|-------|--------|---|---------|----|
| 和書之部  | 萬葉集畧解  | 辛 | 伊勢物語    | 二  |
| 古事記傳  | 古今集遠鏡  | 六 | 玉勝間     | 十五 |
| 曆朝紹詞解 | 後撰集新抄  | 六 | 玉人一首    | 一  |
| 神代正語  | 同別記    | 一 | 波止みの鏡   | 二  |
| 神壽後釋  | 新古今集抄  | 五 | 江戸職人歌合  | 二  |
| 直毘靈   | 美濃の家苞  | 五 | 御遷幸長哥   | 一  |
| 萬我の比禮 | 同折添    | 三 | 八日新日記   | 一  |
| 葛花    | 尾張の家法と | 九 | 地名字音轉用例 | 一  |
| 三大考   | 源氏物語手枕 | 一 | 天祖都城辨   | 一  |
| 冠位通考  | 三代調類題  | 六 | 和歌五百題   | 二  |

經書之部

羣書治要 四

四書集註道春点 十

同上紙 十

同片假名附 四

文選李善註 十

毛詩國字辨 十

孝經鄭註 一

同指解 一

服膺孝語 一

國語定本 六

莊子因 六

明季遺聞

牧民忠告解 一

女いま免 一

傳子 一

常語數 二

物數稱謂 一

律數揚榷 二

从翁茶史 三

六諭衍義大意抄 一

詩集之部

三野風雅 五

誹書之部

批把園發句集 二

同後編 二

同類題發句集 二

同三日月集 一

同麻苧集 一

同雀芝集 五

同五七集 五

同鳶の眼 一

同瓢日記 一

同菴の犬 一

同法々花經 一

劉向說苑 五

同考 一

同參註 六

同上紙 十

同列仙傳 一

韓文起 十

今世說 一

世說音釋 五

左傳蒙求 二

星渚堂對問 一

大學參解 一

論語參解 五

暢園詠物詩 一

日下新詠 一

晞髮偶詠 一

畸人詠 一

先友詩抄 一

寒林刪餘 一

金山稿 一

宋詩合辟 一

清百家絕句 三

蒙求標題詠 一

金城白湯集 一

日本詠物詩 三

同隨筆 一

同七部集 小本 二

同二編 二

同三編 二

同四編 二

同五編 二

也有翁鷄衣 合本 四

同前編 三

同後編 三

同續編 三

同拾遺 三

誹諧百人一首 一

|      |        |       |
|------|--------|-------|
| 醫書之部 | 醫家千字文  | 冢田物   |
| 積聚編  | 痘疹妙藥集  | 冢註周易  |
| 備考方  | 妙藥手引草  | 同正文   |
| 提耳談  | 易書之部   | 同毛詩   |
| 溫疫論  | 增補卜筮盲笈 | 同正文   |
| 藥品考  | 同文政再板  | 同六記   |
| 古方通覽 | 同增續    | 同老子   |
| 方書摘要 | 同大全    | 左傳增註  |
| 經穴秘授 | 同極秘    | 孟子斷   |
| 醫事古言 | 同卦象解   | 昼錦行   |
| 吐方撮要 | 易道早合点  | 作詩質的  |
| 的治療方 | 人相早合点  | 江尾往還蹤 |

|       |          |         |
|-------|----------|---------|
| 物品識名  | 佛書之部     | 論語羣疑考   |
| 同拾遺   | 釈迦應化畧諺解  | 大峯文集    |
| 蘭藥鏡原  | 宗門畧列祖傳   | 滑川談     |
| 醫生堂雜話 | 奎斯幾      | 隨意錄     |
| 内外要方  | 閑居忘草     | 天文曆學之部  |
| 同二編   | 圓戒琢磨訣    | 天文四星風雨考 |
| 同三編   | 圓光大師御傳畧贊 | 天文候鑑    |
| 同四編   | 永平道元行狀圖  | 日用曆談    |
| 傷寒論持解 | 觀音施魚畏圖   | 觀象圖說    |
| 宋板傷寒論 | 現生護念之圖   | 晴雨管規    |
| 同正文   | 菩薩戒童蒙談抄  | 晴雨考     |
| 本朝水種方 | 唐士談語     |         |

手本物之部

猿山詩哥帖

正面摺之部

長雄書札集

同乞巧帖

土由敢寸珍孝經

長松貴札帖

同年中帖

漢魏隸書帖

空洞書翰

同尺一集

九疑山碑

大橋遺帖

同千字文

郭有道碑

同改年帖

同書通案文

義之周府君碑

同今川狀

同書札法帖

李邕沙羅樹碑

同池凍帖

同嵯峨名所

渤海藏真帖

同書用集

同四季歌文

東坡自我帖

同當用集

同四季文集

同大江帖

同書札集

同江戸川用文

同歸去來詩帖

同新消息

同筆用集

董其昌天馬賦

同初學手本

同私用集

同衆鳥帖

同かか手本

同清風帖

同秣陵帖

同庭訓往來

二節詩歌撒英

道風草書帖

同風月往來

消息案文

信海三十六歌仙

同明衡往來

定家朗詠

陋室銘

同商賣往來

行成朗詠

同

同江戸往來

筆曲大意抄

草木性譜

同江戸名所

同ニ輪入

草木有毒圖說

御家書札文海

立花當用集

同當時用文章

煎茶早指南

諸禮大學

同永代用文章

同上紙

同早速千字文

神術極秘卷

十躰千字文

|        |        |   |      |    |       |   |
|--------|--------|---|------|----|-------|---|
| 石刻法帖之部 | 夫子廟堂碑  | 一 | 北齋漫面 | 十二 | 神事行燈  | 一 |
|        | 朱子風雪帖  | 一 | 北齋面譜 | 三  | 同二編   | 一 |
|        | 宋七君子法帖 | 一 | 同上紙  | 一  | 初學画手本 | 一 |
|        | 歐陽詢九成宮 | 一 | 一筆画譜 | 一  | 福善齋画譜 | 五 |
|        | 子昂要霍帖  | 一 | 兩筆画譜 | 一  | 武勇魁圖合 | 一 |
|        | 同羊公帖   | 一 | 同上紙  | 一  | 同二編   | 一 |
|        | 徂來大曆帖  | 一 | 英勇画譜 | 一  | 算法之部  | 一 |
|        | 廣澤樂得帖  | 一 | 道中画譜 | 一  | 本朝算鑑  | 三 |
|        | 米元章天馬賦 | 一 | 浮世画譜 | 一  | 開式新法  | 二 |
|        |        |   | 同上紙  | 一  | 玉積通考  | 三 |
|        |        |   | 同二編  | 一  | 點竄指南錄 | 三 |

|      |       |   |      |   |        |   |
|------|-------|---|------|---|--------|---|
| 繪本之部 | 繪本新出科 | 二 | 同上紙  | 一 | 同二編    | 三 |
|      | 同庭訓往來 | 三 | 玳琳漫画 | 一 | 同三編    | 三 |
|      | 同女今川  | 一 | 蕙齋鹿画 | 一 | 同四編    | 三 |
|      | 同彩色入  | 一 | 同二編  | 一 | 同五編    | 三 |
|      | 同大江山  | 一 | 同三編  | 一 | 周髀算經圖解 | 五 |
|      | 同彩色入  | 二 | 同四編  | 一 | 同國字解   | 二 |
|      | 同曾我物語 | 一 | 同五編  | 一 | 算法工夫之錦 | 三 |
|      | 同彩色入  | 二 | 北溪漫画 | 一 | 同發隱錄   | 一 |
|      | 同咲分勇者 | 一 | 北雲漫画 | 一 | 開運かんろ記 | 一 |
|      | 同彩色入  | 二 | 同上紙  | 一 | 萬室大通考  | 一 |
|      |       |   | 文鳳鹿画 | 一 | 八木龍の卷  | 一 |
|      |       |   | 同上紙  | 一 |        |   |



|         |      |       |
|---------|------|-------|
| 字引節用之部  | 將碁之部 | 百人首之部 |
| 滿字節用錦字選 | 將碁道標 | 樓鳳百人  |
| 同中紙     | 同觀手  | 同上紙   |
| 同上紙     | 同金襖  | 蓬萊百人  |
| 早字節用集   | 同鷲爪  | 同上紙   |
| 同上紙     | 同定跡  | 吾妻百人  |
| 同大全     | 同連珠  | 同上紙   |
| 同上紙     | 同名家友 | 錦葉百人  |
| 同真字附    | 同古今集 | 同上紙   |
| 同上紙     | 同相掛集 | 麗玉百人  |
| 四穀節用集   | 同指南車 | 同上紙   |
| 同上紙     | 同百番笈 | 今様百人  |

|       |         |        |
|-------|---------|--------|
| 手紙早引集 | 同自在     | 同上紙    |
| 永樂古扶揃 | 渡世肝要記   | 女今川貞操鑑 |
| 同上紙   | 同二編     | 同上紙    |
| 同假名附  | 碁經之部    |        |
| 同上紙   | 碁經奕範    | 秉穗録    |
| 初學古扶揃 | 同奕筌     | 同二編    |
| 同上紙   | 碁立手談    | 彼此合府   |
| 同假名附  |         | 延壽養生談  |
| 同上紙   | 大日本國郡全圖 | 養生要論   |

東都 書物問屋 尾州名古屋本町通七丁目 永樂屋東四郎  
 江戸日本橋通本銀二丁目 同 出店  
 懷州大垣本町 同 出店

